vol. 06

伊計島　犬名河（インナガー）

沖縄歴史の散歩道

湧き水を歩く②

本誌上及び沖縄総合事務局ウェブサイト「オキナワンパールズ」にて歴史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を紹介します。

久高島　ヤグルガー

沖縄の島々のなかには、さまざまな自然条件から水の確保が難しいところもありました。たとえば久高島は最高所が約17メートルの琉球石灰岩におおわれた平坦な低島で、1978年に海底送水が開始されるまで島内ですべての水を調達しなくてはいけませんでした。しかし水はけのよい石灰岩の平野部には湧き水はなく、海岸にある断崖の下から湧き出るヤグルガーなどのわずかな場所から水を汲み、生活をしていました。

同じく伊計島も海岸部の崖下から湧き出るインナガーなどを生活用水としていました。島民は長い階段を降りて水を汲み、重い水を運びながら再び長い階段をのぼるという大変な作業を強いられていたのです。

宮古島　大和井（ヤマトガー）

宮古島でも人々は水の確保に苦労していました。ほぼ琉球石灰岩で構成される宮古島の海は屈指の美しさを誇りますが、地上では雨水は地下にすぐ浸透し、大きな川はできず稲作も難しい地域でした。生活用水の確保は困難で、崖下の湧き水や洞窟内の地下河川などに依存するほかありませんでした。平良の大和井（ヤマトガー）や城辺の天川（アマガー）などが知られています。宮古島の芸能であるクイチャーも「雨ごい」をテーマにして発展してきた側面があり、水に対する渇望が島の人たちの文化にも影響を与えていたようです。なお1979年に日本初の本格的な地下ダムが完成し、宮古島は水不足から解放されることになりました。

宮古島　友利の天川（アマガー）

一方、水の豊かな島は恩恵だけがあったわけではありません。現在では根絶されましたが、八重山はかつて蚊を媒介とするマラリアの発生地域で、水のある場所は蚊が多く感染の危険がありました。琉球王国時代、八重山の鳩間島や新城島の人々は日常的に船で西表島に通い、そこにある水田で稲を栽培していました。マラリアの危険がなく水はけがよい石灰岩の低島で暮らし、水は豊かで稲作ができるものの、マラリア感染の恐れのある西表島に日帰りで耕作をする生活をしていたのです。厳しい自然の中で南西諸島の人々は暮らしていたことがわかります。

上里 隆史
（うえざと・たかし）

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ボーダーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「ブラタモリ」案内人などメディアでも活躍。